

『近代歌謡考説』とその周辺

飯倉 洋一

一 『近代歌謡考説』出版 中村幸彦書簡を手がかりに

『近代歌謡考説』は忍頂寺務の歌謡関係の論考を集めた論集で、出版計画が進んでいたものの未刊に終わった。現在その草稿が二種ある。一つは天理大学附属天理図書館に蔵され、一つは大阪大学附属図書館小野文庫に蔵される。後者は前者を改稿したものである。ここでは前者を第一次草稿、後者を第二次草稿と呼ぶことにする。出版計画には中村幸彦が深く関わっていたことが、小野文庫所蔵の務宛中村幸彦書簡からわかる。務宛中村幸彦書簡は全部で四十六通（書簡番号716～761、内田宗一氏整理であるが、そのうち、『近代歌謡考説』関係のものは七通である。この七通を時系列に沿って紹介し、簡単な解説を付すことにする。なお翻字にあたって、漢字は通行の字体に統一した。

昭和二十一年十月二十一日（746封書）

拝啓。秋涼の候 先生益々御清祥御慶に存じます 私事公私冗雑にとりまぎれ長々御無沙汰御海容願上ます

御送りの翠泊^(翠)志外二部確に落掌仕りました 御言葉に甘えて先般のもの三田村先生のもと共に長々保存し利用させていたゞきます 御

芳志深謝の念と存じあげます

御下命の製本五冊今日送り申します 実はもう少し早く出来上り居りました処

先頃御あづかり申しました先生の玉稿類につき大阪の書肆積善館にತ್ತめ居ります知人來訪 是非出版いたしたく一度社長及び係諸氏と相談いたすべく暫時拝借いたし その上先生へも改めて御願ひ申すとて持帰りました 私勝手にとりはからひました事は御許しの程をその返事が参り次第一度参上その折り製本出来も持参いたさうと思ひのびくになつて居りましたが 先づ製本類御送り申します 出版の方はその中何かの返事ある事と存じますが もし先方にて希望いたし参りますれば 御許可いたゞければ御幸ひと存じます この事は詳しくは申しのこしまして 匆々乱筆御許しを

十月二十一日

中村幸彦

忍頂寺先生

尚たゞ今開催中の展覧会目録一枚同封いたします。以上

中村幸彦は当時天理図書館に勤務、忍頂寺務は神戸在住である。中村は

務の洲本中学での後輩にあたる。「翠泊^(ミヅ)」(正しくは「箔」)志は書名。

「製本」とは、忍頂寺務の蔵書・草稿の和綴じ製本のことか。図書館勤務の中村幸彦が業者を斡旋したものとされる。ただし中村も業者も、代金は取らずにという方針だったことが、の書簡から分かる。

「積善館」は大阪の出版社。日記や教科書の出版に力を入れていた。昭和二十二年四月十日、中村幸彦校注『春雨物語』を出版している。本簡より、昭和二十一年十月ごろ、中村は務の原稿を預っていたことがわかる。

昭和二十一年十月二十八日(74封書)

前略

前便少しく申し上げました先生玉稿御出版の事 昨日大阪積善館より何卒出版させていただきたいと申しました 御許可の程願ひ上げます 実は前便に申し上げました如く 積善館のもの同伴御願ひに参上いたすべく心算いたし居りました処 只今天理教秋季大祭の余波にて何かと雑用有之 とりあへず乍失礼 初より寸楮を以つて御願ひ申し上げます 尚詳細はいづれ先方とも打合せ御意うかがひ申しますが、御許しいただける事といたしまして 題は何とうけましたもので御座いませうか、

又全部で四六版百八十頁菊版にして百五十頁程と相成り もし幾分にも尚御加へいたゞきますれば なほ更の幸ひと申し居ります事 又所収の箇々の御論文はいかに配列いたしましたものかなど これは後程御あづかり申し居りますものゝ目録を作成いたし御送り申し上げます

早々御考へおきいたゞきますれば諸事都合かと存じます

尚々御許可の御願ひを重ねて申し上げます

匆々

十月廿八日

中村幸彦

忍頂寺先生

中村の知人で積善館の社員が、社長などに交渉したようで、話が具体的な本の造り方に及んでいる。中村作成の「目録」は、書簡の解説を参照されたい。

昭和二十一年十一月四日消印(74葉書)

拝啓

御手紙二通拝見いたしました玉稿御出版の御許可有難く存じます 題名及び追加之分の事早急出版社の者にも相談いたし 諸事御報告 改めて御願ひ申し上げます 製本代の事何時も申し上げます如く御心がけ御無用で御座いますのに御配慮の程恐縮に存じます 折角御恵み被下ました事故今度にかぎり製本の者に相わたす事にいたします 右の者にはかり私より御礼申し上げます とりいそぎ用件のみ 匆々

務は二通の書簡を中村に出し、出版の件を許可した上で、書名を告げ、追加分の原稿のことも相談してきたようである。

製本代も同送した模様であるが、中村は恐縮している。

昭和二十一年十一月十五日(74葉書)

前略 先程御示しの御書面につき積善館と相談いたしました結果ご報告申

し上げます

先づ早速御承諾いただきました事私より有難く御礼申しくれとの事で御座いました

書名は先生御一案の近代歌謡考説に御願ひ申しくれとありました

内容の配列も先生御案歌謡考説と静村随筆とにいたしましたしまして歌謡関係十三章を前著、以下を後者に加へくれとありました

それから希望といたしまして伝記編ともなづくべき頼三樹三郎の書

翰、紅蘭未亡人の書翰等はこの度は御のぞきいたゞければと申来たりました 私该案はこれを随筆の中に加へたくも思ひ居ります いずれ御めもじの折のご相談に残したく思ひます 追加の分は先生御示の珍籍翻刻を是非御願ひいたしくれと喜び居ります それぞれの御研究の末に加へてゆけば如何かと思はれます。それで原稿作成で御座います、御あづかり申し居ります分も一度うつしとつて印刷所へまはしたく思ひ居りますので、何でしたら私方で作らせましてもと考へます 先生御手元にて御作りいたゞければこれに越した事は御座いません

それで御相談御礼かたゞ積善館編輯長石田忠弘氏が御目にかゝりたいと申居ります 先方は来十二月の初旬中で、月・水・土にあたります適当な日を御えらび願へばと申し居ります たゞし月水土は先生の御都合にていか様にもお定め被下ば必ずとは申し居りません それでもし先生図書館でも御来訪の折りあれば、奈良にてでも晚餐を共にさせていたゞいたらばと申して参りました これも遠路御足労の事で御座いますれば 神戸大阪にても適当な所御定めいたゞければ幸との事で御座いました 日時場所等御都合御伺ひ申し上げます

尚内容御論文の配列の事 私方でも考へさせていたゞきますが、積善館より作成し来たりました目録がありますので御送りいたします 先生の方でも御考へいたゞければと存じます 右とりいそぎ前伺いたしました 御判読を

十一月十五日

匆々

中村幸彦

忍頂寺先生

書名は務の案「近代歌謡考説」と決まる。それ以外のものを「静村随筆」として、もう一冊製作することも記されている。「伝記編とも名づくべき」もののうち、「頼三樹三郎の書翰」は『陳書』十四号（昭和十七年十二月）、「紅蘭未亡人の書翰」は、『上方』百十一号（昭和十五年三月）に掲載されたものである。着々と出版に向けて進んでいく状況が見取れる書簡である。さて、「積善館より作成し来たりました目録」とは、天理本に付された中村幸彦自筆のメモによれば、次の通りであった。便宜的に番号を付す。

近代歌謡考説目次

歌謡考説

- 1 一 中節の古板本について
- 2 一 中節稀覯本
- 3 正徳四年十一中節註本
- 4 竹婦人呉丈に就て
- 5 兎びや節に就て

5 音曲びんがてう

音曲びんがてう本文（翻刻）

6 音曲浮名笠

音曲浮き名笠附古版絵表紙唄本（翻刻）

7 伊勢音頭に就て

8 味噌屋板の兵庫節に就て

9 大阪に於る兵庫口説に就て

10 潮来節に就て

11 潮来節の瓦版に就て

〔瓦版潮来節（翻刻）〕

12 法華歌だいい

13 大津絵節に就て

以上

（此外に執筆の歌謡関係に研究を加ふること）

昭和二十一年十二月一日（75葉書）

御手紙拝見いたしました。

去月の事積善館よりも打合せが参りまして、御来州を御待ち申して居ります。

写真は出来るだけ沢山入れる様にと先方へも申してあり、写真かゝりにも相談済みであります。

ご研究も多々益々結構と存じられます。

御あづかり申してあります玉稿類は既に先般のご指示の通り順序もならびかへを了しました。詳しくは御めもじの上と御返事迄。匆々

一日

写真図版も多数掲載の方向で行くという報告である。

昭和二十二年一月十七日消印（75葉書）

年頭の御感懐拝吟させていたゞきました。平常なまけて休みにのみ仕事を残し居（マ）きました天罰に年末年始もなく、新春の御慶も未不申（マ）上げず失礼の事。御高免願上げます。

御序文三田村鳶魚翁御序の事誠に結構の事と存じられます。秋本氏へも御傳へよろこばせ申す事にいたします右おそくながら御慶など
く迄

一月十六日

三田村鳶魚に序を書いてもらうことも務の提案であつた。鳶魚と務との交友は、大正十三年に遡り、同十五年には初対面を果たし、以後書籍の貸借や、相互訪問、鳶魚主催の輪講参加など、密な交際が続いていた。実際に鳶魚が序文を書いて寄越してきたのは三月のことであつた。天理本の冒頭に、務宛に送られてきた鳶魚の序文原稿と務宛の文章、そして封筒が付されている。その消印は三月六日である。以下天理本の序文を左に翻字することにす。旧漢字はもとのままとす。

序文

よみ本で、今日はバカのみない世の中だと云つたのは、寶暦度のことであるから、二百年前の感歎なのだが、同じ感歎を浮世草紙がしてゐると比べて、江戸は上方よりも、四五十年遅れてゐたらしい、そのバカの名残は、東京になつても天晴な名物になつてゐて、或る社會

の通言にフツ、といふのがあつた、是は大バカの産地富津を呼び替えたのであつた、ところが観音崎砲臺の築造によつて、此無二の大バカの漁場を失ひ、渠の見事な姿が見られなくなり、其上に深川名物の、實に忘れられない生疇ナマヒのバカの時、串のま、を火鉢へ掛けた餅網の上で焙つて山葵醤油、堪えられない手酌の一杯、相手がなくても、コイツは飲めたのも、昔話になつてしまつた、バカのなくなつたのは、それだけで済まず、二十五座の神樂もバカの拂底さ加減は、歌舞伎の女形と御同様の成行、苦しがつて面芝居と出掛けたのも、早已に五十年にならう、儲も哀れを止めたは、小バカのむきみ、半臺の底浅し、果して然らば現代に殆と無くして、稀にも有らざるは大バカなり、供需関係から尠いものは高くても、無いものに相場はあるまい、ナンデ、ペランメエ、無價の珍物といふのは、茲を云ふんだぞ、我が知友先輩、勿論多くはない、憚りながらたつた五六人、片手の指の寝て一疊、坐つて半疊、狭くはない全日本に、歌謡に関する知識に於いて、此人々と肩を比べる者もあるまい、その人々の中に異彩を放つ忍頂寺君の博大清到、それこそ無價の珍物に紛れもない近代歌謡考説である、歌謡に総と別と二様ある、総じては國語の精華であつて、異國他國の言語・文章に移し得ない、其國に限つた眞に獨存殊立のものである、別しては時々民族生活を見せてをり、生活は智識と富饒と制度との三すくみで、三者各其優勝を恣に出来ないとなるに、玩味すべき興趣があらう、又深感省すべき黙示もあらうといふもの、著者の壇場とする寶曆以降の歌謡は、それから已前のものにして同様であるけれども、自ら別段な梯子もあつて杯と、不調法な口上は却つて、お邪魔さまである。

や、仕切りに手間取るより、もつとく嬉しくないのが序文の長いでせう、と利口ぶつて

昭和廿二年三月とはいへ、未だ梢の雪の解けやらぬ寒さを炬燵にぬくめ鳥、ヒイヒヨロロウの聲もえ揚げず

鳶魚生 首垂れてしるす

この序文に続いて、玄龍すなわち鳶魚の務宛の文章がある。

御申し聞けのまゝ兎に角相認呈出仕候 御覽の上に取すて被下候ても御恨無之候 アマリ不出来汗面至極候 背文字も同事 しかし此頃の紙の様子知れ不申 ツカの見計もいかゝ 是又両様相認封中仕候 是とて御用に立ち候や 御取すて被下候て決して差支もなく候 又々申へく候へ共当用まで

六日 玄龍

静村老台

務は、この鳶魚の原稿を、控えをとつて、そのまま中村に送つたものと思われる。よつて現在天理図書館に蔵されているのである。

ところが、最終的にこの出版計画は版元の事情で頓挫する。

昭和二十二年四月二十日(751封書)

拝啓 春暖の頃となりました 先生御清祥の由御慶に存じます ご無沙汰長々の事何卒御高容の程にて一昨日積善館秋本氏 私方へも玉稿を返し参りまして、出版事情 経営事情など咄 秋本氏としては再三社幹部にも談じ合ひました由なれどといかんの意を表し了解を得に参りました 甚だ残念の事種々正しもいたしましたますが、と断念するの

余儀なき次第になりました

この度の事誠に私の粗相よりあの様な出版社に咄しましたかへつて先生に御迷惑を御かけ申しました事、何とも申し上げ様もなき失態にて平に御許しを願ひます外仕儀ない次第 御海容を懇願いたします
玉稿は御下命の通り兎も角そのまゝ私の方へ御あづかり申しおきます

御光来の御予定との御事御待ち居ります その折万々わび申し上げる事といたしまして 取敢へず、御わび迄如斯に御座います

四月廿日

敬具

中村幸彦

忍頂寺先生

中村は原稿を引き続き預かるが、遂に出版の機会を訪れなかつたのである。一方務は、出版を想定して天理図書館に預けた原稿を一部改訂し、中村に要請された追加原稿を加えた第二次草稿といふべき原稿を用意していた。それが、現在小野文庫に残された『近代歌謡考説』（小野文庫³⁸⁷）と、『自筆草稿』（小野文庫³⁸⁸）である。

二 『近代歌謡考説』の成立と構成

中村幸彦が預かつた務の自筆原稿（第一次草稿）は、既発表稿十三本（小野文庫の目次では二本が一本に統合されて十二本）を務が改訂した自筆稿百六十七枚であった。それに中村幸彦が依頼して追加された六本と、既発

表三本を加えた二十一本を、さらに務が改訂版として書き直したものが、現在小野文庫に遺されている。『近代歌謡考説』第二次草稿（二十一本）である。この第二次草稿は、小野文庫には、『近代歌謡考説』（小野³⁸⁷）と、『自筆草稿』（小野³⁸⁸）とに分割され、それぞれ百三十五枚、七十八枚であるが、総合すると、四百字詰原稿用紙二百十三枚となる。そのうち五本はのちに発表されることになる。

以上述べてきた『近代歌謡考説』の生成を図示しておこう。

また、それらを構成する各論文の初出雑誌と、その依拠資料について、忍頂寺文庫、小野文庫の請求番号を付して示しておいた。

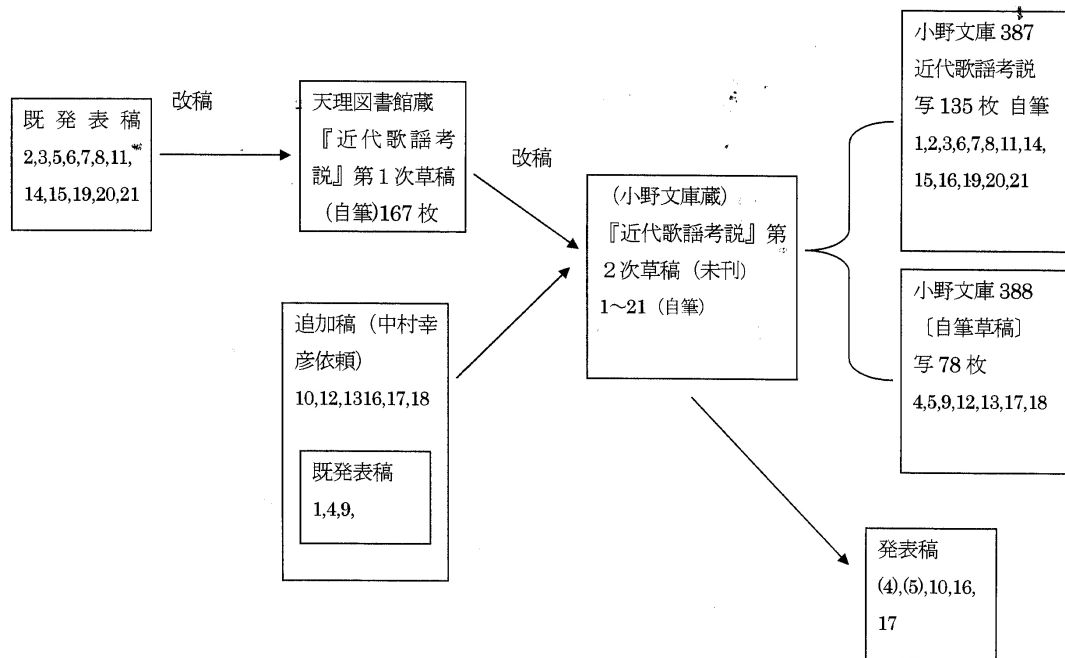
天理本での当初の目次構成案から、かなり動きがあったことがわかる。

また後に述べるように、務は出版を期して、初出以後入手した資料や情報を用いて、内容を増補改訂している。

しかし、残念ながら第二次草稿の出版は幻に終わった。務の無念は想像に余りある。忍頂寺務の歌謡研究の復権を掲げ、その業績を顕彰する我々のプロジェクトは、この第二次草稿を復元し、本報告書に掲載することにした。

三 兵庫口説研究の進展

務の歌謡研究は、そのテーマで論文を公刊したあとも進展していたことが、これらの諸稿本を検討することによって明らかにされる。ここでは、『上方』第二十号（昭和七年八月）に発表された「大阪に於ける兵庫口説に就て」が、どのように改訂されたかを見ていくことにしよう。



『近代歌謡考説』の生成（数字は小野文庫本目次順序）

『近代歌謡考説』(第2次稿本)の構成(網掛けは天理本所収論文)

天理本 目次順	小野 387	小野 388	小野本 目次順	論文名	発表誌(年月)ゴシックは昭和22以降	参考原本群・稿本群(未定稿)
	○		1	上方役者ほめ詞	「上方」13 昭和7年1月	G47-7(新版ほめことば)
5	○		2	音曲ひんがてう 同翻刻	「陳書」10 昭和14年4月	G70 G71
6	○		3	音曲浮名笠 附古板絵表縦唄本(翻刻)	「書物展望」10-7 昭和15年	G93
		○	4	都踊くどき	「陳書」1 昭和6年8月 「金曜」2-1 昭和25年2月	G118~124 小野375(都おどり口説)
7		○	5	伊勢音頭に就て	「陳書」8 昭和12年9月 「本道楽」11-3 昭和6年7月 「金曜」昭和26年8月	G105 G134-10 G136-5 G140~142 G155
4	○		6	えびや節について	「上方」9 昭和6年9月	G94-1
8	○		7	味噌屋板の兵庫節について	「書物の趣味」7 昭和7年1月	G128 小野373 はやり音頭兵庫ぶし
9	○		8	大阪に於ける兵庫口説について	「上方」20 昭和7年8月	G134~137 小野374 [兵庫くどき]
		○	9	兵庫口説余録		小野388
			10	越後口説	「金曜」3-9 昭和26年10月	小野370(越後口説き)小野371(越後口説き)
12	○		11	法華歌だいご	「上方」101 昭和14年5月	
		○	12	さんげさんげ		小野388
		○	13	あほだら経		小野388
10	○		14	潮来節に就て	「書物の趣味」3 昭和3年12月 「演芸月刊」6 昭和4年3月	小野410 潮来文献 G197 G198
11	○		15	瓦版の潮来節に就て 瓦板潮来節(翻刻)	「陳書」9 昭和13年5月	G197 G198
	○		16	よしこの節	「金曜」1-1 昭和24年1月	G109(自筆稿本)
		○	17	都々一節	「金曜」3-4 昭和26年5月	G109(自筆稿本)
		○	18	都々一節余録		小野388
13	○		19	大津絵節について	「上方」12 昭和6年12月	G215 G281の16~45
1			20	一中節の古板本について	「書物展望」13-3 昭和18年3月	G21,G22
2	○			一中節稀観本	「陳書」6 昭和11年4月「陳書」10 昭和14年4月 「陳書」13 昭和17年5月	G21,G22
3	○		21	竹婦人呉丈について	「陳書」15 昭和19年6月	

まず、『上方』所収原稿から天理本への改訂を見ていこう。掲出は冒頭部分、傍線部が天理本で増補訂正された箇所である。

大阪に於ける兵庫口説に就て

兵庫くどきは享保頃から文化文政年度まで大阪地方に行はれた盆踊音頭の一でありまして、もとく兵庫から移入せられたものと考へますが、其傳統は明かでありませぬ。流行地域は大阪以西、兵庫、播州、淡路、廣島、門司あたり迄の廣範圍に及び、その年代も兵庫口説の前驅をなしたる津村節、ゑびや節等と比べて非常に永く、又それだけ現存の資料も豊富に有ります。

兵庫口説の曲調は、神戸白川在の一部に残つて居ると聞きましたが、未だ取り調べの機會を持たせぬ。播州地方、門司地方にも近年まで傳はつて居る筈ですが、一般には忘れられて仕舞ひました。然し只今迄に蒐集せられた百数十種の詞章から分類して、熊野節、甚九節、早口うたせの三種類に區別せられます。兵庫で出来た唄本には、兵庫口説とせず單に兵庫節と記したるものも澤山あります。此等の唄は一章つゝ單行本になつて居り、その板元は總計二十餘軒に及びますが、過半は大阪の市内に有りました。即ち左の通りであります。

阿波屋文藏	大阪心齋橋三寺北入
浅田屋徳兵衛	同 島之内三休橋
和泉屋平兵衛	同 心齋橋筋周防町東入
糸屋市兵衛	同 天神橋筋伏見両替町
勝尾屋六兵衛	同 御堂前唐物町北入
河内屋長七	同 天満十一丁目

塩屋善兵衛	同 順慶町通四丁目
正本屋仁兵衛	同 心齋橋筋南久太郎町
天満屋源二郎	同 西横堀船町
鉄屋源右衛門	同 天満市ノ側
豊後屋伊兵衛	同 安治川橋北詰
本屋宇兵衛	同 天満市ノ側
本屋与兵衛	同 博労町佐野屋橋筋
綿屋喜兵衛	同 北堀江市ノ側
河内屋権右衛門	同 嶋之内笠屋町
正本屋茂吉	同 御堂筋米屋町

さて大阪の盆踊りですが、古き時代は知らず、徳川泰平の治世が續くに連れて、盆踊は佛者の信仰を離れて漸次遊興化し市中へ進出して来ました。之を場所の關係から分けて三種に區別して見ませう。その第一は町踊り、即ち屋外の踊りで、西鶴の「五人女」に、天満の鍋島殿屋敷の前にて、京の道念仁兵衛が口うつし、山くどき、松盡しを謳つて踊つたと云ふ。これは天和貞享頃の話であるが、斯様に市中の廣場又は街路上に催すものは、踊の古い形式で有りませう。街上の場合には、長持を出して往来に關をしたと云ひます。

さらに、天理本から小野文庫本への改訂をみていこう。傍線部が増補訂正された箇所である。タイトルは「大阪板の兵庫口説に就て」となっている。

兵庫くどきは享保頃から文化文政年度まで大阪地方に行はれた盆踊

音頭の一つで有りまして、もとく兵庫から移入せられたものと考へますが、其傳統は明かでは有りませぬ。その流行期間は、兵庫口説の前驅をなしたる津村節、ゑびや節などと比べて非常に長く、又それだけ現存の資料も豊富に有ります。

兵庫口説の曲調は、前に述べたる如く、神戸白川在の一部に残つて居ると聞く、又播州地方、門司方面にも近年まで傳はつて居る筈ですが、一般には忘れられて仕舞ひました。然し只今迄に蒐集せられた百数十種の詞章から分類して、熊野節、甚九節、早口うたせ、土佐の種類に區別せられます。此中の土佐と云ふは、詳しく分りかねますが、早口うたせの一種と見れば、兵庫くどきは三種類に成ります。兵庫で出版の唄本には、兵庫口説とせず、單に兵庫節と記したものが多いのですが、大阪板のものは、大抵兵庫くどき熊野節など、曲節の名も記して有ります。此等の唄は一章づつ、紙数二枚又は三枚の單行本になつて居り、その板元は総計二十餘軒に及びますが、過半は大阪の市内に有りました。即ち左の通りです。

阿波屋文藏	大阪心齋橋三寺北入
浅田屋徳兵衛	同 島之内三休橋
和泉屋平兵衛	同 心齋橋筋周防町東入
糸屋市兵衛	同 天神橋筋伏見両替町
勝尾屋六兵衛	同 御堂前唐物町北入
河内屋長七	同 天満十一丁目
河内屋権右衛門	同 嶋之内笠屋町 (飯倉注順序入替)
塩屋善兵衛	同 順慶町通四丁目
正本屋仁兵衛	同 心齋橋筋南久太郎町
正本屋茂吉	同 御堂筋米屋町 (飯倉注順序入替)

天満屋源二郎	同 西横堀船町	玉水源二郎と	同
一人か			
鉄屋源右衛門	同 安治川橋北詰		
豊後屋伊兵衛	同 安治川橋北詰		
本屋宇兵衛	同 天満市ノ側		
本屋与兵衛	同 博労町左野屋橋筋		
綿屋喜兵衛	同 北堀江市ノ側		

此中にて出版種類の多かつたのは豊後屋、次に勝尾屋、綿屋、鉄屋、糸屋の順序で、その他は餘り重要で無い。

さて大阪の盆踊りですが、古き時代は知らず、徳川泰平の治世が續くに連れて、盆踊は漸次に遊興化し、市中へ進出して来ました。之を場所により分けて見ますと、その第一は町踊り、即ち屋外の踊りで、西鶴の「五人女」に、天満の鍋島殿屋敷の前にて、京の道念仁兵衛が口うつし、山くどき、松盡しと云ふ道念節を謳つて踊つた。これは天和貞享頃の話であるが、斯様に市中の廣場又は街路上に催すものは、最も古い形式で有りませう。街上の場合には、長持を出して往来に關をしたと云ひます。

以上、ほんの一部だけ具体例を見たが、務が一度論文としてまとめた後も、常に情報収集を心がけ、データの増補訂正に余念がなかつたことが伺われる。その研究者としての良心は尊敬に値すると言つべきだろう。

【付記】中村幸彦先生の書簡公開をお許し頂きました御遺族の青木晃氏、翻刻許可を頂きました大阪大学附属図書館に深謝申し上げます。

